

序

21世紀に入り開発される大半の抗悪性腫瘍薬は分子標的治療薬である。細胞増殖因子、受容体およびシグナル伝達、細胞周期、アポトーシスなどにかかわる分子・酵素を選択的に修飾することにより抗腫瘍効果を得ようとする試みは無数に存在し、開発中の薬剤につけられる製品コード番号を見ているだけでは何の薬剤か理解できない場合も少なからず遭遇している。これらの薬剤を用い適切な個別化治療を行うためのバイオマーカーの開発も重要な研究課題である。がんの分子標的治療に関する教科書は数多く出版されているが編者ごとにその内容が基礎的記述に偏重していたり、分類が重複していたり、臨床成績の羅列だけであったりして全体像を理解しにくいものが多い。特に基礎研究については自己の研究成果の範囲から脱却できていないものもみられる。また臨床成績については数年経つとまったく内容が異なったものとなり up-to-date の改訂が必要である。これは短期間の間に数多くの分子標的治療薬の臨床試験が進みがん治療薬として導入されることによる。一方本書でもみられるごとく無数ともいえる新化合物が存在するものの多くはコード番号のまま消滅の運命をたどっている。

本書「がんの分子標的と治療薬事典」はがんの分子標的に関する用語、実際の各臓器がんの分子標的治療、それに用いられる治療薬について最新の成績を網羅している。治療薬・阻害剤については、承認されたものから検討されてまだ日の浅いものまで幅広く含まれているが、国内承認薬、海外のみ使用可能な薬、治験中の薬に分類されている。どのようなカテゴリーの化合物が薬剤になりやすいかも理解できると推察される。

本書は短いスパンで改訂が迫られると思われるが、がんのメカニズムの解明や治療薬開発を目指す基礎研究者のみならず、分子標的治療に携わる医師も刻々と進歩する医学を up-to-date に catch up する必要がある。

2010年8月

西尾和人，西條長宏